

4-6 救いのシンボル

昔、古老の人から聞いた話ですが、住んでいるところは大雨があると増水するところ、氾濫常襲地帯だったそうで、当時は今のような行政からの避難勧告や警告といったものがなくて、いわば自主避難の時代に、集落はどのような判断をしていたのかを聞いたことがあります。それは、ある家の親父が慌て始めると来るぞというサインだったそうで、彼が動きだすとみんなが構えるということだったそうです。おそらく、その家が一番先に被害を受けるところにあったのだと思います。つまり避難のスイッチというのを持っていたということになります。これは、ある意味で集落のコミュニティの原始版のようなもののようなものを共有していたということになります。つまり、どうなったらどうなるのかを見通して、そのサインを決めていたということになります。ある意味で、定点観測のようなもので、我々も地すべり、土石流、がけ崩れといった土砂災害の発生について、これと似たようなことを住民の方にお知らせすることがあります。あそこがこうなったら危険だとか、あそこの動きとか水の出方をよく見ておいてくださいというようなことを伝えることがあります。

いま盛んになっているというか、ますます精度が向上している情報ですが、発信する側と受信する側で、少々その受取り方が異なっているような気がしています。情報通りに行動してくれる人は少なく、情報を出しても自分の感覚や好奇心が危険側に働いているということも言われています。受け手側としては、情報をどう使うのか、何ができるのかが理解されていないと、ただのお知らせになるということだと思います。この辺はハイテクすることだけではいけないわけで、受け手の目線で一緒に工夫していかないと宝の持ち腐れになるような気がします。そのためにも正しい知識を持っていただくということが絶対に必要だと思いますし、逆に情報がすべてであるということでも待ちになっているのも問題で、情報とは薬であるということで、使い方によっては毒にもなるということかなと理解しています。また、情報とともに、事例として問題になっているのが避難所のことです。避難所には、それ自体の安全性と距離のことがあります。安全性とは、建物の耐震性のほかにその立地にリスクがないのかどうか、津波が来ない、土砂災害の危険もない、水害でも影響圏外であるということがベストではありますが、事情によっては一部だけの満足になっているものもあり、確認周知が必要になります。これは、ある程度の調査や地域情報によって判断ができるわけですが、その次に大事なことは避難所が地域住民にとって容易に行けるところかどうかです。今年の豪雨災害では、行きたいと思っても距離があつていけないとか、外が暗くなって不安だということがあったそうですし、2階で避難するように言われても不安で仕方なかったという例が報告されています。つまり避難所が頭にあることで、危険な避難を誘発するようでは困ると思います。

このような悩みをなくすためにも、一時避難する場所を決めておくということと早めの避難を試みる必要があると思います。つまり次善のところを有して、最善なところに避難するというのも地域によっては考えておく必要があると思います。